

【和鉄の道・Iron Road】【Pdf File 2016.10.14. 産経West 新聞ニュース切り抜き】

淡路島 松帆銅鐸は出雲と同じ鑄型の兄弟銅鐸 国生神話の出雲・淡路は強い結びつき  
淡路と島根の銅鐸が同型…作られたのは、どこ？ 鑄型の記号一致 2016.10.14.

淡路の松帆銅鐸は出雲と兄弟銅鐸銅鐸 国造り神話の国 出雲と淡路とは強い結びつきが考えられ、また、この二つの国間にある播磨野播磨風土記にはヤマト連合と在地の勢力との接触&抵抗を示す「妻問い-印南別嬢の抵抗」伝承が記載されている。この時代、初期ヤマト王権誕生にこれらの国がどうかかわり、どんなドラマが展開されていったのか……興味は尽きない。新聞で報道された 兄弟銅鐸のニュース。新聞切り抜きで、整理して まとめました。

昨年4月に兵庫県南あわじ市で見つかった紀元前3～前2世紀（弥生時代前期末～中期初頭）の松帆銅鐸7個のうち1個が、直線距離で約200キロ離れた島根県雲南市の加茂岩倉遺跡で20年前に出土した銅鐸39個の中の1個と同じ鑄型で作られた「同範（どうはん）銅鐸」であることが14日、南あわじ市教委などへの取材で分かった。関係者は「銅鐸の製作地や当時の流通ルートを知る手がかりの一つになる」とみている。

同範銅鐸と判明したのは、松帆銅鐸の3号銅鐸（高さ31・5センチ）と加茂岩倉遺跡の27号銅鐸（同31・4センチ）で、3号銅鐸の胴体部分の左下に「王」、27号銅鐸には同じ部分に「土」という漢字に似た盛り上がった記号があった。同じ鑄型で作られた際についたとみられ、鑄造時につく細かな傷の位置なども一致した。

加茂岩倉遺跡は、1カ所での銅鐸出土数が全国最多。大半が中型（高さ約45センチ）の内側に小型（同約30センチ）の銅鐸を収めた「入れ子」状態での埋納法だった。松帆銅鐸も3組6個が入れ子状態で見つかった。

今年2月には2号（高さ22・4センチ）と4号（同22・6センチ）が、江戸時代に淡路島で発見され、南あわじ市の日光寺が所蔵している「中の御堂銅鐸」と同範銅鐸であることが判明している。

難波洋三・奈良文化財研究所客員研究員は「当時から広い範囲で銅鐸が流通していたことが明らかになった。銅鐸の製作地を考える上でも重要だ」と話している。



島根県雲南市の加茂岩倉遺跡で発見された「27号銅鐸」  
（文化庁所蔵、島根県立古代出雲歴史博物館提供）

加茂岩倉遺跡の27号銅鐸と同じ鑄型で作られたことが分かった、  
「松帆銅鐸」の3号銅鐸。「王」のような記号がある

2016.10.14. 産経West より 新聞ニュース切り抜き

次ページに さらに 2016.10.27.神戸新聞朝刊1面 & 27面に掲載された記事を追加掲載しました

【参考】【和鉄の道・Iron Road by Mutsu Nakanishi】

大和の進出による新旧勢力交代による 国づくりの始まりを示すのか ???

「伊弉諾神宮 国生み神話の島」 淡路島で 大量の埋納銅鐸出土 2015.5.20.

国譲り神話の出雲の大量の埋納銅鐸出土（加茂岩倉・荒神谷遺跡）とそっくり

■ <http://www.infokkna.com/ironroad/2015htm/iron11/1506doutaku00.htm>

■ <http://www.infokkna.com/ironroad/2015htm/2015iron/15iron10.pdf>

# 淡路と出雲兄弟銅鐸続々

## 絵や傷一致 弥生時代、広域交流か

昨年4月に南あわじ市で出土した松帆銅鐸7個（弥生時代前期末～中期前半）のうち4個に、それぞれ同じ石製の鋳型（同范）で作られた兄弟銅鐸（同范銅鐸）があることが分かり、南あわじ市教育委員会などが26日発表した。4個のうち松帆5号と呼ばれる銅鐸は、島根県出雲市の「荒神谷遺跡出土銅鐸」（6個、国宝）6号（高さ23・7センチ）との兄弟関係を新たに確認。同じ古代神話の地である淡路と出雲地域の関係などにも注目が集まる。（27面に関連記事）

他の兄弟銅鐸は、松帆3号と島根県雲南市の「加茂岩倉遺跡出土銅鐸」（39個、国宝）27号（高さ31・4センチ）▽松帆2、4号と南あわじ市の「中の御堂銅鐸」（高さ22・5センチ、重要文化財）一で計3組。いずれも、3番目に古い型式で両脇にひれの付いた「外縁付紐1式」、文様は縦横の帯で四つに区切られた袈裟のような「4区袈裟禪文」。表面の拍傷（鑄型の傷）のほかに、松帆3号は「王」字状の図像、松帆4号ではシカの絵などの特徴が手掛かりとなった。

松帆銅鐸は、松帆3号と島根県雲南市の「加茂岩倉遺跡出土銅鐸」（39個、国宝）27号（高さ31・4センチ）と推定。松帆3号と加茂岩倉27号は未確定。松帆2、4号と中の御堂銅鐸では、松帆2号が最も後とみられる。兄弟関係を確認したのも一部が残存し、研究所共同研究員は「当時のハイテクで作られた銅鐸が、遠距離まで流通していたことが分かる。今後の研究で原料の交易や生産状況、弥生社会の姿などが分かってくるだろう」と期待する。

（田中真治）

2016.10.27.  
神戸新聞朝刊  
1面&27面掲載記事



**【補追 参考】**  
2016.10.27.神戸新聞に本ページの記事が掲載されましたので、追加しました。参考まで

# 神話の舞台 関係示唆か

## 淡路と出雲「日本書紀」にも記述

### 松帆の兄弟銅鐸

松帆銅鐸	型式	文様	高さcm	兄弟銅鐸	備考
2号	外縁付紐1式	4区袈裟禪文	22.4	中の御堂銅鐸（南あわじ市）	つり手に斜格子文シカの絵（2号は欠）
3号	外縁付紐1式	4区袈裟禪文	31.5	加茂岩倉27号（島根県雲南市）	「王」字状の図像
5号	外縁付紐1式	4区袈裟禪文	23.5	荒神谷6号（島根県出雲市）	破損

（1号は現段階で兄弟なし。6号、7号は調査中）

野裕文化財課長は今「はできないが、両地域の関係が後代に伝えられていたとみられる」と話す。

一方、兄弟銅鐸は同生時代の広域のネットワークで出雲と淡路が結ばれていたと考えられるが、生産地から別々に淡路、出雲へ運ばれた可能性も「本書紀」に、出雲の豪族の祖とされる淤土宿禰が土地争いの解決のため、淡路の海の民80員は「工人（職人）集めて銅劍358本が出した荒神谷遺跡（同）の例と類似している。」と記述があるが、両地域に直接関係の隔たりがあるため、直接結び付けることはできない。

（堀井正純）

